正義の味方を目指した『殺人貴』

眠れる英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
正義の味方を目指した『殺人貴』

【Ｎコード】
Ｎ８４６７Ｚ

【作者名】
眠れる英雄

【あらすじ】
――これは、一人の少年の物語。誰よりも『正義の味方』に憧れながら、誰よりも『殺人貴』に近かった男の物語。そんなガラスのような少年は、何処に向かうのか――　「言っただろ？　俺が……『殺人貴』だ」

平穏

――シキはさ、どんな大人になりたいんだ？――

眩い日差しの中で、彼――ナギ・スプリングフィールドに訊かれる。

その笑顔を、その強さを、決して失いたくないと。

こんなにも世界は美しいのだから、今この瞬間の幸せが永遠であってほしいと。

そう思うから、誓いの言葉を口にする。

今のこの気持ちを、いつまでも、決して忘れずにおきたいから。

――俺はな、正義の味方になりたいんだ――

「……うん？　夢か……」

暖かい日差しに照らされて、俺は半分寝惚けたように呟いた。日の傾きが、先ほどと比べてだいぶ差がある気がする。

俺は寝転がっていたベンチから身体を起こすと、寝惚けた頭を回転させるべく思考の海に潜る。

俺の名前はシキ・クライスト。今年で確か１３歳になる。今はフリーの傭兵で、確か雇い主の名は――

「む？　何じゃシキ、もう目を覚ましたのか？」

後ろから声をかけられる。振り返ると、そこには両手にソフトクリームを持った俺の今の雇い主――アリカ王女がいた。

「……よう、アリカ。買い物は終わったのか？」

「何を言っておるか。お主のせいで休憩しておったわ」

そう言って渡されたソフトクリームを受け取ると、アリカも同じように俺の横に腰かけた。

「しかしさ……何が護衛だよ。完全にお前さんの荷物持ちじゃねぇか」

そう、今日の俺の仕事はコイツの護衛だった。本来なら今日は昨日の疲れを癒すために一日中部屋で寝ているつもりだったんだが……。

「何か文句でもあるのか？　護衛はお主の仕事じゃろうが」

「荷物持ちは仕事じゃねぇよ！」

俺は怒鳴るように言いながら、ソフトクリームを食べていく。疲れた身体に染み渡る甘さが、身体を癒していく。

「てかよく普通に買えたな？　お姫様がこんな所にいたら驚くだろ普通」

「？　よくわからんが、何でも『デート』とやらでサービスらしいぞ？」

「……おい、ちょっと待てやコラ」

誰と誰がデートしてんだよ。

チラッと向こうでソフトクリームを作っている屋台のおじさんを睨むと、どういうわけか満面な笑みでグッと親指を上に向けたままこちらに腕を突きだしてきた。

……違いますよおじさ――ん！　俺とコイツはカップル何かじゃありません！　ただの依頼主と傭兵の関係です！

「ところでシキ。『デート』とは何じゃ？」

「知るか。王宮の奴らにでも聞いてろ」

「むう、いったい何なのじゃ……？」

不思議そうに首を曲げるアリカの様子を見て、思わず苦笑する。

本当なら、俺はコイツの側になんかいてはいけない。俺みたいな何

万人の命を奪ってきた『殺人貴』が、こんな平穏を感じてはいけないはずだ。

アリカはみんなの『光』の存在だ。その笑顔が人を、国を元気にする。俺みたいな『闇』が側にいてはいけないのだ。

……いったい俺は、どれほどの命を奪ってきたのだろうか？　少しでもたくさんの人に笑っていて欲しい。そんな、馬鹿げた理想を胸に走ってきた。

十救うために一を殺し、

百救うために十を殺した。

千を救うために百を殺し、

万を救うために千を殺した。

彼らは悪いことなんか一つもしていない。ただ、そこにいただけで死んだのだ。

……俺の、この手のせいで。

『そこにいたお前たちが悪い』、なんてことは言わない。悪いのは全て俺なのだから。

結局俺は誰も救ってなどいない。少しでも犠牲が少ない方を切り離しただけ。自己満足で殺しただけだ。

そう、だから俺は『正義の味方』などではない。

俺は『悪』であり、『殺人貴』であり、そして――

「……おいシキ、聞いておるのかシキ！」

「うあ？」

耳元で聞こえた声に、俺は意識を覚醒させる。横を見ると、アリカが心配した顔付きでこちらを見ていた。

「大丈夫かシキ？　急に黙ったと思ったら、何やら複雑そうな顔をしていたが……」

……コイツに心配されているようなら俺もまだまだだな。

俺は出来るだけ無理な笑みを浮かべると、心配そうに見つめてくるアリカの頭を強引に撫でて、

「大丈夫だっつうの。それに、お前に心配されるほどヤワになった覚えはねぇよ」

「な、や、止めるのじゃシキ！　頭を撫でるのではないッ！」

撫でる手を振り払おうとするアリカの攻撃をかわすと、横に置いてあった荷物を手に取りアリカに向かって笑いかける。

「ほら、行こうぜ？　久しぶりの休日だ。何処までも付いていってやるぜ、お姫様？」

「……当然じゃ。お主は私の騎士なのじゃから」

アリカは一瞬恥ずかしそうに頬を赤くしたが、やがて差し伸べていた俺の手を握り締めた。

「俺は騎士じゃないんだけどな……まあいいや。ほら、次は何処に行きたい？」

「む、次は向こうなどどうじゃ？」

「へいへい、了解っと」

そうやって手を繋いだまま歩く二人。その後ろ姿はまるで――

……確かに俺はコイツの側にはいられない。

だから、俺は待とう。

コイツを、救ってくれる人が現れるまで――

心優しさ『殺人貴』ＢＹアリカ

あの男と出会った日のことを、私は今でも覚えている。

何時もヘラヘラしていて、王女である私にも一切敬意を示さず、私をアリカ王女ではなくアリカという女性として見てくれる存在。

けど、本当に彼はそんなに能天気なのではない。本当は夜な夜な自分が殺した罪にうなされ、誰も殺したくないと心から願っていることを、私は知っている。

『正義の味方』を目指しながらも、自らのことを『悪』と名乗り、誰よりも優しい『殺人貴』である――

――シキ・クライストのことを――

初めて出会ったのは、とある戦場だった。私が偶然援助を勤めることになった戦場で、あやつは風の如く現れた。

黒いロングコートを身に纏い、顔はフードで見えず、静かに立たずむその姿は恐怖の存在だったのを覚えている。

『……悪いけど、アンタたちには死んでもらう』

その一言が引き金だった。そこから先に待っていたものは――虐殺だけだった。

例えどんな魔法を使っても、ナイフが魔法に触れた瞬間消滅した。鬼神兵が攻撃しても、またナイフが鬼神兵に刺しただけで跡形もなく消滅した。そう、どんなものも一撃で全て消された。

向こうはナイフ一つしか持っていない。その筈なのに、たった一人殺すところかその一人に軍隊を潰されかけられた。

それで思い出した。噂になっていた、ある話を。

まるで幽霊のように現れる黒コート。現れるのは戦場だけで、現れたのなら片方が全て死ぬまで殺し尽くす戦場の死神――『殺人貴』のことを。

唯一の救いは、あの時はシキが味方だったことだ。もしもあの時、彼の標的が自分たちだったのなら……考えただけでもゾッとする。

私はその時、一度だけ彼を間近で見た。私の正体が敵にバレ、敵国の兵士に襲いかけられて――彼に助けられた。

きっと彼からしたら偶然だったのだろう。ただ敵を殲滅していたところに私がいて、偶々私を助けた形に過ぎない。

けど、あの時のシキは、私にとって――

――窮地を救ってくれた、『正義の味方』に見えたから――

……だからその時決めたのだ。例えどれだけ時間をかけても構わない。必ず彼を、見つけ出すと。

そして時は過ぎ――現在にいたる。

「てかアリカ様？　貴方には俺のこの左腕が見えませんか？　もう荷物がいっぱいで持つところがねぇんだけど」

「ふむ、まだ頭の上が空いておるな」

「いやいや、無理があるだろおい！？」

そうやって二人で軽口を叩きながら街の中を歩いていく。シキは嫌々文句を言いながらも、私の手を放さず握り返してくれる。

暖かい……手。とても悪の人にはない暖かさがあり、思いやりを感

じる。

こんな手を持っている人が、『悪の殺人貴』なはずがない。

「……シキ」

彼の名前を呼ぶ。本当は少しだけ、不安があった。もしかしたら自分は嫌われているのではないか？　迷惑に思われているのではないか？　そんな不安が、私の心を駆け巡っていく。

私は知っていた。シキの仕事――悪名が知れ渡った者の、暗殺。

誰にも頼まれることなく、全て自分一人で用意を済ませ、誰にもバレることなくターゲットを殺す。そのようなことを、私の護衛になってもシキは続けていた。

そして――その夜、殺した人々の顔を思い出し、うなされ、涙を流していることも、全部知っていた。

だから今日は無理矢理シキを誘ったのだ。少しでも息抜きになるように、少しでも彼のためになるように。

だが、それは彼にとって迷惑だったのでは――

「って危ねぇ！？」

「え？」

不安がっていると、シキは急に私の肩を掴み、己れの身体に引き寄せた。

そしてその後に来る突風。それは私の横をとてつもない速さで通りすぎ、もしもついさっきまでの場所に立っていれば下手をすればかなりの重症を負っていたかもしれない。

「――ったく、危ねぇな。こんな狭い道であんなトップスピードで移動するなよな……ってアリカ？」

シキの奴が何かを言っている。だが、それを理解するまでの情報処理能力をそちらまでに使えなかった。

いま私は握っていた右腕で肩を掴まれ、そのまま抱き寄せられた。つまり――

――顔と顔が後数センチの所で停止し、まるで抱き締められる形で立っていた。

「……な、何をしておるか――ッ！」

「べらさッ！？」

突然のことに顔が真っ赤になり、条件反射で王家の魔力を込めて右頬を叩いていた。

その一撃で吹き飛ぶシキ。空中で三回転もし――

「――っていきなり何しやがるッ！？」

――見事空中に舞った荷物を全て受け止め、華麗に着地した。

「お前、人がせっかく助けてやったのにそのお礼がビンタってどういうつもりだ馬鹿アリカッ！！」

「ええぃっ！　いきなりおかしな事をするシキが悪いのじゃッ！！」

「ええっ！？　まさかの責任転換ッ！？」

そうやってシキと言い争いながらも、自分の顔が赤くなっていくのが分かる。

シキの悪いところはそこだ。自覚していないのか、何時も無意識に此方がドキッとしてしまうことをする。

まったく、わざとなら此方も怒れるというのに……。

「やれやれ、まったく我が儘なご主人様だ……」

シキはそう呟きながら前へ進もうとする。当然……その右手には、何も掴まれてなどいない。

「あ……」

今思えば、彼から手を差し伸べてきたことなどあっただろうか？

何故、もっと彼の手を握らなかったのだろうか。

後悔が胸に突き刺さる。そのせいで、思わず立ち止まってしまう。

ああ、あの時もう少し我慢していれば――

「……ああもう、まったく世話のかかる奴だな、本当に」

「えっ？」

俯いていた私の手が誰かに掴まれ、前に引っ張られていく。顔を上げると、そこには仏頂面なシキの顔が。

「ったく、何処まで世話がかかる奴なんだお前は。ほら、とっとと次行くぞ？」

シキはそれだけ言うと、私と手を繋いだまま前に歩き出した。決して遅くなく、されど丁度良い速さで歩いてくれる。

「……シキ、一つ良いか？」

「あ？　何だよ急に」

これだけは、どうしても聞いて置かないといけない。例えその答えが否定であったとしても。

「シキは今……幸せか？」

「……」

勇気を搾り取って言った言葉に、シキは沈黙する。そして数秒間、考える素振りを見せて、

「……ま、確かに今こうして現在進行形で迷惑にあっているけど」

「うぅ……」

やっぱり、迷惑だったのでは――

「――それでも、悪くないと思っているよ」

「え……？」

シキの言葉が頭の中でコールする。今、彼は何て言った？

「ほら、速く行こうぜアリカ。さっさとしないと置いて行くぜ？」

シキは少し恥ずかしそうに顔を背けながら歩き出す。

――けど、その手を放すことはない。

「……はい」

そんな彼の様子が嬉しくて、彼の手を握る手のひらに力がこもる。

ああ、自分が今までしてきたことは無駄ではなかったのだ。今までのことは、ちゃんと彼の心に刻まれてきたのだ。

暗い影を落とすシキ。きっと彼は、地獄には自分一人で落ちようとするだろう。きっと、全ての罪を背負って。

だが、そんなもの私が許さない。シキが地獄に落ちるというのなら、
私が地獄から引きずり上げてみせる。

だって、シキは私にとって――

……シキは何時も独りになろうとする。

だから私が側にいよう。

シキの側に、いつまでも――

戦う理由（前書き）

俺には、殺すことしか出来ないから。

戦う理由

――人々の嘆きが聞こえる。助けを求める声が聴こえる。

俺は普段着を脱ぎ捨て、戦闘着である黒コートを羽織り、フードを被る。

体調は万全。魔力の貯蔵も十分。武器であるナイフもひび割れはなく、何時でも切れる。

……準備は整った。後は、行くだけ。

俺は自室を出て、外に向かう。辺りは闇に包まれていて、窓の外から見える月だけが廊下を照らしていた。

コツコツ、と、俺の足音だけがその場に響く。闇が、全てを飲み込んでいく。

「……この辺でいいか」

ここまで来れば、流石のアイツでも気付きまい。

俺は右手を突き出す構えをとり、魔力を解放する。作るのはゲート。何百本の影で作られた、闇の扉。

「……『ゲート・オープン』」

地面から闇よりも更に深い闇が溢れだし、目の前に空間を作る。そ

れは扉というには脆く、闇というには形がしっかりとしていた。
これは一種の転移魔法。目標となる地点を正確にイメージすることで境界をなくし、空間と空間を繋げる魔法。俺がもっとも得意とする魔法だ。
……行く準備は出来た。行く道も出来た。もう迷うことはない。さあ――

「……やはり行くのか？　シキ」

ピタリと、俺の動きは止まった。振り返る。そこにはやはり声の主である――アリカがいた。

「……よう、こんな夜遅くにどうした？　徹夜は美貌の天敵だぜ？」
俺はなるべく何時も通りに話そうとする。おかしな所はないだろうか？　俺は何時も通り笑えているだろうか？

「誤魔化すのではない。その闇の扉は、何処に向かうものじゃ？」
そんな俺を見透すように、アリカは単刀直入に聞いてくる。答えなければ殺すと言わんばかりの目付きの悪さで。

「何処って……ちょっくら散歩にでも行こうと思っただけだぜ？
最近寒いしな、丁度暖かい服装がこれしかなくて――」

「嘘じゃな」

俺が最後まで言い切る前にアリカがそれを否定した。アリカは強い力のこもった目で俺を睨む。

「お主がその格好をする時は戦場に行くときだけじゃ。それ以外、『殺人貴』の服装をするはずがないじゃろ」

「……参ったな、何時から気付いてたんだ？」

確かに、俺がこの服を着るのは仕事をする時だけだ。この服を着ている限り、俺は『殺人貴』なのだから。

「……どうしても行くのか？　どうしても行かなくてはならないのか？」

アリカはさっきとは違って弱々しい声で俺に問いかける。今にも泣きそうな声で。

その問いの答えは――始めから、決まっていた。

「ああ、俺は行く。戦争が起きているなら、俺は行かないと。だって俺は、正義の――いや、『殺人貴』なんだから」

そう、俺の名は『殺人貴』。殺すことしか出来ない愚か者。殺すことしか、誰かを救うことが出来ない。

そうだ、俺は――『■■の■■』ではないんだ――

「……話は終わりか？　俺はもう行くぞ」

話を遮るように俺はフードを深く被り直し、闇の中へ堕ちていく。音が、光が、闇に飲まれて消えていく。

「ま、待つのじゃシキ！　待っ――」

後ろからアリカの声が聞こえたが、それさえ闇に飲まれて消えた。全てが闇に飲み込まれた世界。このコートのおかげで消えずに済んでいるが、早くしないと俺まで闇に飲み込まれてしまう。

……俺はこれでいいんだ。俺は、闇の住人だから。

さあ、行こうか。戦場へ、戦いの場所へ。今回の目的は二つ。一つは犠牲が少ない方を殺すこと。もう一つは――

――俺の名前はナギ・スプリングフィールド！　最強の魔法使いだッ！――

アイツの、アリカの『光』となる存在を見つけること。

目指す場所はただ一つ。その場所は――

『グレート＝ブリッジ』

――今宵、最強の魔法使いと最凶の殺人貴のが激突する――

『殺人貴』ＶＳ『千の呪文の男』（前書き）

吾は面影糸を巣とする蜘蛛。――ようこそ、このすばらしき惨殺空間へ

『殺人貴』VS『千の呪文の男』

「いくぜぇ！　『千の雷』ッ！！」

右手から放たれた無数に及ぶ雷が、周りの敵を障害物ごと吹き飛ばす。

「おらおら！　まだまだ行くぜぇッ！」

「ハッ！　よそ見してんじゃねぇぞナギ！　『ラカンインパクト』ッ！！」

「あ！　ラカンてめぇズリいぞおい！　待ちやがれッ！」

あの野郎、人様の狙いを勝手に奪いやがって、後でボコボコにしてやる！

……あ？　俺が誰だって？　おいおい、そんなことも知らねぇのかよお前ら。いいか？　耳をかっぽじってよーく聞けよ？

「俺の名前はナギ・スプリングフィールド！　またの名を『千の呪文の男（サウザンドマスター）』だ！」

「おいナギ。貴様誰に向かって言っているんだ。今は戦いの最中なんだからもっと集中しろ！」

「おっと、悪いな詠春」

今話しかけて来たコイツは、近衛詠春。すげぇ剣の使い手だが、ムッツリなのが欠点か？

「……何だか今、誰かに罵倒された気が……」

「き、気のせいじゃねぇか？」

あ、危ねぇ……何て勘の良さしてやがるんだ。

「フフッ、二人とも。動きが止まっていますよ？」

そう言って重力の塊を敵にぶつけながら現れたコイツの名前は、アルビレオ・イマ。何時も笑っていて、付き合いの長い俺でも何を考えているのか分からねぇ野郎だ。

まあ、味方なのは確かだけどな！

「む、すまん。ナギに説教していたらつい……」

「まったく、バカ弟子には何を言っても無駄じゃろうに」

「それはねぇだろ、師匠！」

まったくどいつもこいつも人のこと馬鹿にしやがって！

ああそうそう、俺がリーダーを率いる『紅き翼』は、今ある作戦に出ていた。その作戦の名は『グレート＝ブリッジ奪還作戦』だ！

俺はこの戦いで、『千の呪文の男（サウザンドマスター）』の名前を世界に轟かせてやるぜ！

「おら！　行くぜ野郎共ッ！！」
俺は杖を通して魔力を解放し――

――『死』を、覚悟した。

「な……ッ！」
身体を、指一本動かすことが出来ない。立っているだけで、全身から冷や汗が止まらない。
まるで、喉元にナイフをつけられている感覚。死が、すぐ側に感じる。

「……おい？　どうしたナギ？」
ついさっきまで暴れていた筋肉ダルマ……もとい、ラカンが俺の様子に不思議に思ったのか、近付いてきた。
「ら、ラカン……お前、何も感じないのか？」
「ハァ？　何言ってんだお前。まさかびびってんのか？」

……確かにびびってるのかもしれない。こんな死の恐怖、生まれて初めてかもしれない。

今なら分かる。これが――本物の殺気。

「……いるんだろ、出て来やがれ」

必死に自分の手足に命令して奮い立たせる。魔力を全開にまで解放し、最初から全力でいく。

恐らくこの殺気は俺一人に向けられたモノ。つまり、奴の標的は……俺だ。

「ハァ？　何言ってんだお前――！？」

ラカンが何かを言おうとした。しかし、その瞬間――奴は、現れた。

――黒い闇が、地面から溢れ出す。まるで、人々の怨念で出来ているかのように。

闇はやがて一人ぐらい通れる大きさになると、その薄暗い闇の中から誰かが出てきた。

闇と同じように黒いコートを羽織り、フードを被っているせいで素顔が見えない。身長は俺と同じくらいで、男性なのか女性なのかも分からない。

だが、一つ確信を持って言えることがあった。

――コイツが、あの殺気の奴だ。

黒コートの野郎は俺たちの目の前に立っているだけ。それなのに、一瞬でも視界から消えたら見失ってしまうほどの、気配の薄さだった。

まるで、本当は誰もいないような……。

「……お前か？」

ふと、黒コートの野郎が口を開いた。その声からして男だろうか？　たいして大きな声でもないのに、何故か耳にすんなり聴こえてきた。

「……お前が、『千の呪文の男』か？」

……ッ！　コイツの狙いは俺かッ！！

「……悪いなラカン。今日の対決は中止だ。どうやらご指名のようだしな」

「ま、またナギ！　コイツはヤバい。全員で行くべきだ！」

「ハッ！　心配するなよ詠春。俺を誰だと思ってやがる？　俺は最強の魔法使いだぜ？」

詠春が止めてくるがそれを振り切って、黒コートの前に立つ。

「……最強の魔法使い、か。変わらないんだな、お前は」

「あ？　何か言ったかてめぇ？」

「……いや、何も。さあ、初めようか、『千の呪文の男』」

黒コートはスッと腰から一本のナイフを取り出すと、まるで蜘蛛のように顔を地面スレスレまで近付けた状態で構えた。

「……黒コート……ナイフ……気配を感じない……『殺人貴』？」

すると何やらブツブツと呟いていたアルが、ふと何かに気付いたように叫んだ。

「気を付けて下さいナギ！　恐らく彼の正体は『殺人貴』です！」

「「「「なッ！？」」」」

あ……あの『殺人貴』だって！？　噂には聞いたことがある。戦場にしか現れず、現れた場合片方が全滅するまで殺し尽くすという戦場の死神。その正体が、コイツッ！？

「……そうだ。我が名は『殺人貴』、殺すことしか出来ない、愚か者だ」

一瞬の油断だった。次の瞬間――殺人貴のいる辺りから、黒い影が溢れ出した。

黒い影はやがて形を変え、何十にも編み込まれた黒い球体を作った。
そう、これはまるで――

「吾は面影糸を巣とする蜘蛛。――ようこそ、このすばらしき惨殺空間へ」

――蜘蛛の巣だ。
球体の隙間から見える月に照らされて、殺人貴は祈るかのように月を見上げていた。

「こんなんで、俺を閉じ込めたつもりか？」

確かにラカンたちは見えなくなったが、その程度どうでもよかった。
だいたい、今回は俺一人で決着をつける気だったしな。

「来ねぇならこっちから行くぜ！　『雷の暴風』ッ！！」

呪文を唱え、右手の魔力を解放する。放たれた一撃が、巨大な竜巻となって殺人貴に襲いかかる。

が――

「――遅ぇよ」

”パキンッ”と、そんな乾いた音が響くのと同時に――

――『雷の暴風』が消滅した。

「……は？」

そんな目の前の光景に、思わず呆然としてしまう。いったい、何ガ起キタ？

『雷の暴風』が消滅した所を見ると、そこには先ほどと変わらず殺人貴が立っているだけ。……いや、よく見るとナイフを前に突き出す構えで立っていた。

「……て、てめぇ！　今何をしやがった！」

「……何も。俺はただ――」

一瞬、殺人貴と視線が重なる。ほんの少し見えた瞳が、蒼く染まっているように思えた。

「――殺しただけだ」

「――――ッ！！　チィッ！」

一瞬感じた恐怖。紛れもない『死』の予感。全身の細胞が叫んでいる。

――コイツはヤバい、今すぐ逃げろ、と。

「ふざけんじゃ……ねぇえええええええええッ！！」

俺は後ろギリギリまでバックステップで跳ぶと、前方に向かって『魔法の矢』を出せる限り叩き込む。

こんだけ狭いんだ。これだけ撃てば何発かは当たるはずだ！

――だが、殺人貴はその予想すらも凌駕した。

殺人貴はまるで蜘蛛の如く闇の影を蹴り飛ばしながら、あり得ない動きで移動する。

影を何度も蹴り、魔法の矢をスレスレで避け、当たる魔法の矢をナイフで消滅させた。

尋常じゃない速さ。常人には考えられない行動力。

――まるで、死にに行くかのように。

奴はやっぱり凄い。だが、一つだけ分かったことがある。

（落ち着け……アイツは確かに恐ろしい。けど、所詮それだけだ）

どういうわけか、魔法を消滅させる能力。そしてあの尋常じゃない

反射能力。確かに恐ろしい。けど――

「落ち着けば……敵わない相手じゃねぇッ！！」

今度は魔力を放出するのではなく、肉体を強化する。問題はあのナイフ。あれさえ奪えば、勝てる！

確かに見た。あのナイフが間に合わずに『魔法の矢』が殺人貴に触れた所を。その時確かに、アイツはダメージを受けていた！

「うおおおおおおおおおッ！！」

「――く！」

俺のパンチと殺人貴の蹴りがお互いに炸裂する。アイツの蹴りは俺の鳩尾に、俺のパンチは狙い通り、アイツの右手に！

受けた衝撃で右手の力が緩む。そして――殺人貴の右手から、ナイフがこぼれ落ちた。

「しま――」

「させるかぁあああああああああッ！！」

チャンスは……今しかない！

「いっけぇえええええええええッ！！」

「く！　『影の障壁』――ガハッ！」

肉体強化の魔力を全て右手に集中し、殺人貴が作った障壁ごとぶん殴る。障壁は一撃で貫通し、そのまま地面に叩き落とした。

もう次はねぇ！　これで……終めぇだ！

「うおおおおおおおおおッ！！　『千の雷』ッ！！」

殺人貴が起き上がる隙も与えず、ありったけの魔力をこの魔法に込める。

次の瞬間――俺の腕から、轟く無数の雷が殺人貴に向かって解き放たれた。

当たる確率１００％。この一撃を食らったら、さすがに死を免れることは出来ないだろう。

その一撃を、殺人貴は――

「う……うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

初めて聞いた、殺人貴の絶叫。殺人貴は狂ったように叫びながら、右手で何かを貫くような構えを取り――

――雷を、貫いた――

音が、雷鳴が、その場に響き渡る。俺たちを覆っていた黒い影も、

無残にかき消されていた。
近くにあるものがほとんど消滅した。地形すらも、変化した。けど
――
「……嘘、だろ……」
――それでも、殺人貴は生きていた。
右腕は雷に触れたせいか服ごとボロボロで、だらんとぶら下げている。黒コートは至るところに焦げ目がついており、身体のあちこちから血が吹き出していた。
確かに生きていることには驚いた。だが、それ以上に俺はあることに驚いていた。
「……何で、お前なんだよ……何やってんだよ、シキッ！！」

――シキ・クライスト。

俺の幼なじみであり、昔ある誓いを共にした親友の顔が、『殺人貴』を名乗る男のフードの下にあった。
「……さすがは『最強の魔法使い』だな、ナギ」
殺人貴――いや、シキは自虐的な笑みを浮かべた。まるで今の自分

が滑稽と言わんばかりに。

「何やってんだよお前は！　何で『正義の味方』を目指していたお前が、『殺人貴』なんか呼ばれてんだよッ！！」

そうだ。俺とシキは昔、ある約束をした。

俺は『最強の魔法使い』になること。

シキは『正義の味方』になること。

ずっと忘れもしない、大切な約束だったはずだ。それなのに――

「……簡単な話だ。正義じゃ、世界を救えないことを理解しただけだ」

シキは疲れたような笑みを浮かべる。まるで、心をすり減らされてきたかのように。

その笑みは、とても十四歳の少年が浮かべる笑みではなかった。

その笑みを見て、酷くシキとの距離を感じた。昔はすぐ横にいたのに、今では手の届かない所まで行ってしまったように感じる。

「……けど、お前が昔のままでよかったよ。お前になら、アイツを任せられそうだ」

「シキッ！？」

シキはフラフラになりながらも、落ちていたナイフを回収し、自分

の後ろに闇のゲートを開いた。

「――じゃあな、ナギ。お前は『光』の道を行け」

「シキぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃッ！！」

必死に手を伸ばす。けど、その手は掴まれることなく――闇へ、堕ちていった。

こうして、『グレート＝ブリッジ奪還作戦』は連合の勝利で終わった。

だが、その戦いには大きな犠牲が伴われた。

やがて、戦争を操るものたちの後ろ姿が分かるようになる。

姫と騎士が出会う時、殺人貴は何を思うか――

『殺人貴』ＶＳ『千の呪文の男』（後書き）

……何だかよく分からない戦闘描写になってしまいました。

くそう！　もっと才能があれば！

それでも私は貴方を――（前書き）

――ありがとな、アリカ

それでも私は貴方を――

――それは突然だった。王宮の片隅で、その扉は開いた。

「――ガハッ！　はぁ、はぁ、はぁ……」

身体の激痛に意識を軽く飛ばしそうになりながらも、俺は血だらけの身体を動かし闇の回廊をくぐる。

闇の回廊をくぐり、王宮の中に入った瞬間――

――俺は、倒れるように床に這いつくばった。

「ゴフッ！　……ああ、やっぱすげぇなナギは。たった一撃で、内臓のほとんどを持っていかれちまった。身体が、動かねぇ……」

先程の『千の雷』を受けたせいだろうか？　身体が、動かない。感覚が、まったく分からない。手足は冷え、意識が眠ろうとしている。分かってる。頭じゃこのままいたら俺は死んでしまうこと。けど、身体中から流れていく血と共に生命力まで消えていく。

ああ、まずい。このままじゃ、本当に死んで――

『――シキッ！！　大丈夫かシキッ！！』

……だからだろうか？　死ぬ直前だから、俺はこんな幻覚でも見ているのだろうか？　でなければ、ありえない。

「ア……リ……カ……？」

俺の目には、どういうわけかアリカがこちらに走って来ているように見えた。何時ものような堂々とした雰囲気ではなく、今にも泣きそうな表情で。

「ったく、なに泣いてんだよお前は……」

「それ以上喋るな！　――誰か、今すぐ治療班をッ！」

『王女？　いったいどうなされて……ってシキ様！？　な、何がいったいあったのですかッ！？』

「話は後じゃ！　早くせいッ！」

『あ、はい！』

側にいた護衛兵が俺の様子を見て、慌てた様子で走り出していく。

俺はそんな様子を、まるで夢心地のような感覚で見つめた。

いや、本当は夢なのかもしれない。シキ・クライストという少年が

見ている最後の夢。本物の俺は、この冷たい廊下で一人生き絶えているのかもしれない。

夢なのか、現実なのか。遠退いた意識がその境界をなくしていく。意識が、何を考えているのか分からなくなる。

――だからだろうか？　こんな事を、思わず口にしてしまったのは。

「アリカ……」

「シキッ！？　大丈夫なのか！？　絶対死ぬではないぞ！！」

「――ごめんな」

「え……！？」

それは、何に対しての謝りだったのか、それすら分からない。ただ、今まで塞き止めていた何かが取れたように言葉が口から溢れてきた。

「ごめんな、アリカ。あんだけカッコつけた癖に、この様だ。結局俺は、何処まで行っても『殺人貴』なんだな」

……そうか。これはある少年の本音なのだ。俺という少年が見せた、初めて見た年相応の弱さ。どれだけ人を殺しても、どれだけ人に恨まれても、決して見せる事のなかった本当の俺の気持ち。

「ハハッ、まったく何が『殺人貴』だ。こんな無様で、こんな弱いガキが、いったい何が出来んだよ。自分自身すら救えない奴が、誰かを救える訳がねぇだろ」

ハハハハハッ、と、渇いた声が耳に響く。壊れたように、疲れきったような声。アリカはそれを、必死に手を握り締めながら黙って聞いていた。

「まったく、滑稽だよな。俺みたいな大量殺人者が生き延びて、救われるはずの人々が死んでいく。助けてって、死にたくないってあんなに叫んでたのに、俺はその人たちに手を差し伸ばす所か殺す事しか出来ない」

気付けば、俺は泣いていた。目から真っ赤な血の涙を流し、その時のことを思い出しているかのように。ただ、壊れたように言葉を繋げていった。

「何で……こうなったのかな？　何で……あいつらが死ななきゃいけないんだ？　あいつらが、何か悪い事でもしたのか？　違うだろ？　あいつらは、ただ生きたかっただけじゃねぇか。幸せじゃなくてもいい。ただ、平穏に生きて生きたかっただけじゃねぇか。何で、そんな人たちが死んで、俺みたいなクズが生き延びちまったんだよ」

目の前に浮かぶのは護れきれなかった人々の笑顔。みんな苦しそうに、けど毎日楽しそうに生きていた。俺はそんな人々を守るために、『■■の■■』になるために、戦ってきたはずだ。けど、これじゃ

――

「俺の、俺のせいなのか？　俺がいるから、『殺人貴』がいるから、罪のない人たちが死ななきゃいけないのか？　だったら俺なんか――」

――死ねば、良かったんだ――

「……いい加減にせんか、馬鹿シキ」

アリカは、我慢の限界だった。手を握り締めた指は真っ赤を通り越して青くなり、怒りのせいで身体が震える。

「あ、アリカ……？」

「自分が死ねば良かったじゃと……？　寝言は寝て言うのじゃ馬鹿シキ。何も知らぬお主が、勝手に自分の命の価値を決めるではない」

アリカは、何を怒っているのだろうか？　胸蔵を捕まれているせいで、後アリカが俯いているせいで、どんな表情をしているのかまったく分からない。

「お主は何時もそうじゃ。自分の命を他人のものより優先順位を下にする。自分の命が、まるでどうでもいいと言わないばかりに」

ポタリポタリ、と、彼女の足下に何かが垂れる。これは……透明な、水？

「何故、そんなことをする？　それを見て、私が何も思わぬと思っているのか？　お主が死んで、私が悲しまぬと思っているのか？」

アリカは顔を上げた。そして、そこには――

「――もう二度と、自分が死ねばいいなどと言うな」

――子供のように、ポロポロと涙を流すアリカの表情があった。

……ホント、馬鹿だな俺は。本当に、大馬鹿野郎だ、俺は。

俺は、感覚が無くなりつつある腕を必死に動かし――アリカを強く抱き締めた。

「し、シキッ！？　お、お主いったい何をしておるのじゃ！？」

アリカが俺の腕の中でジタバタ暴れるのが分かる。それでも、離さない。強く強く、抱き締める。

アリカは暖かった。血が抜けていっている俺とは違い、ドクンと鼓

動の音が大きく聞こえる。

生きているという証。それを今俺はアリカを通して教えられ――初めて、理解した。

ああ、そうだ。ずっと言わなきゃいけなかった言葉。けど恥ずかしくて、照れ臭くて言えなかった事。

俺は彼女の金色の髪を撫で、耳元に口を近付け――

「――ありがとな、アリカ」

――意識を、失った。

それでも私は貴方を――（後書き）

この作品の主人公は若干切嗣さん似です。痛みを理解していて、理想と現実の差に悩む……そして、それをアリカが側で支える。そんな物語にしたいです。

後、更新が遅れてしまってすみませんでした！　しばらく現実世界の方が忙しくて中々書くことが出来ませんでした。

次回はなるべく早く更新するつもりなので、感想お願いします。

次回、ついに出会う二人ッ！！　同じ『正義』を名乗りながら対極の存在である二人を見て、彼女は何を思うのだろうか？　感想よろしくッ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8467z/

正義の味方を目指した『殺人貴』

2012年1月14日17時53分発行